人間文化論叢　第8巻　2005年

動詞「限ル」とその派生形

——接続表現、文末表現、モダリティと文法化——

角　田　三　枝*

The verb *kagiru* and Derived Expressions : Their Finite and Non-finite Uses, Modality and Grammaticalization

TSUNODA Mie

abstract

There are various expressions in Japanese that are derived from the verb *kagiru* 'to limit'. This paper argues that, in terms of semantics, morphology, and syntax, some of these expressions are grammaticalized as clause-linkage markers. They include ～ *kagiridewa* 'as far as X is concerned', ～ *kagiri* 'as far as, as long as', 'as much as', 'as far as X is concerned', ～ *nikagitte* 'limiting X to Y', 'particularly when…', 'particularly those who…' 'anything else but X', and 'anyone else but X'. The differences among these expressions can be systematically accounted for by the five-level classification of clause-linkage proposed by Tsunoda (2001, 2003, 2004). The verb kagiru generally means 'to limit'. But it is also grammaticalized as a sentence-final expression for modality, in which case it follows a noun or a verb in the non-past tense form and it means 'X is the best'.

Key words : *kagiru*, ～ *kagiridewa*, ～ *kagiri* , ～ *nikagitte*, clause-linkage marker, grammaticalization, sentence-final expression, modality

1. はじめに

「限ル」という動詞がある。また、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテなど、動詞「限ル」から派生した表現がある。「限ル」の文字通りの意味は「～を限定する」という意味である。しかし、「限ル」とこれらの派生表現は、この意味からは離れて、様々な用法があり、接続表現または文末表現になっている場合がある。接続表現や文末表現として用いる場合は、もとの動詞「限ル」に比較すると、その意味、形態、統語の違いが顕著に見られる。

筆者は、角田（2001、2003、2004）で、節・文の連接とモダリティに関する五つのレベルを提案した。この枠組みは動詞「限ル」から派生した様々な接続表現の分析においても有効である。

「限ル」を文末表現として用いる場合は、文末のモダリティ表現となっている場合もある。この「限ル」の意味の変化は、文法化の観点からも興味深い。

本論の構成は以下のとおりである。2節では「五つのレベル（節連接とモダリティの階層）」を簡単に紹介する。3節では、「五つのレベル」と動詞「限ル」から派生した接続表現、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテを考

キーワード：かぎる、～かぎりでは、～かぎり、～にかぎって、接続表現、文法化、文末表現、モダリティ

＊つくば日本語クラス（TaNo-C）主宰、立正大学文学部非常勤講師

察する。4節では、文末表現としての～ニ限ルを検討する。5節では結論を提示する。

2. 五つのレベル（接連接とモダリティの階層）

角田（2001、2003、2004）は、節の連接において五つのレベル（節連接とモダリティの階層）を設定し、原因・理由（タメ（ニ）、ノデ、カラ）、逆接（ナガラ、ニモカカワラズ、ノニ、ガ・ケレド）、条件（ト、バ、タラ、ナラ）といった意味が異なる接続表現について、それらの用法の異なりを、すべてその五つのレベルでの使用、不使用によって、並行的に示すことができることを述べた。その五つのレベルは、その他の接続表現や副詞句の用法についてもあてはまると思われる。

「節連接とモダリティの階層」とは、以下のIからVのようなものである。（この「節連接とモダリティの階層」を簡単に「五つのレベル」と呼ぶ。）以下、原因・理由、逆接、条件を表す接続表現を例に用いて説明する。

以下のIからIIIのレベルは、従属節で表す事態と、主節で表す事態との間に、出来事としてのつながりがある。

[1] I「現象描写」のレベル

従属節が事態を表し、主節も事態を現す。主節は実際に起きた現象、起こっている現象、あるいは習慣的に起こる現象を述べる。また、従属節で述べる事態と主節で述べる事態が未実現、既実現の事柄にかかわらず、出来事、事態として結びついている。以下に例を示す。

(1) お腹が空いたので、ラーメンを食べた。

(2) このボタンを押すと切符が出る。

[2] II「判断」のレベル

従属節と主節はIのレベルと同様、事態と事態の結びつきを表し、さらに主節が判断を表す。ヨウダ、ラシイ、価値判断、義務、免除、禁止（テハイケナイ）、許可、推測、後悔、感情、願望、意思など、話者の判断を表す。真偽判断（カモシレナイ、チガイナイ、ハズダなど）も、このレベルに入れておく。このレベルには、いろいろな性質のものが混じっているが、このレベルでもやはり従属節で述べる事態と主節で述べる事態が、出来事としてつながっている。以下に例を示す。

(3) 宿題を出せば、掃除をしなくてもよい。

(4) 午後は暑くなるので、泳ぎに行くつもりだ。

[3] III「働きかけ」を表すレベル

Iのレベル、IIのレベルと同様に、従属節と主節は事態として結びつく。主節は、助言、依頼、勧誘、禁止（～ナ）、警告、命令などの働きかけを表す。以下に例を示す。

(5) 仕事が終わったら、はやく帰りなさい。

(6) 勉強しているのに邪魔するな。

以上、IからIIIまでのレベルの共通点は、従属節と主節の間の出来事としてのつながりに注目している点である。一方、以下のIVとVのレベルは、従属節と主節が、出来事としてのつながりではなく、主節のモダリティ部分との結びつきの関係を表している。また、従属節と主節の連接は、IからIIIのレベルでは、現実世界における結びつきを述べているのに対し、IV、Vのレベルでは、話者の認知的世界における結びつきを述べている。

[4] IV「判断の根拠」を表すレベル

主節が判断を表し、従属節がその判断の根拠を表す。この場合は、従属節と主節の表す事態の結びつきを述べるのではなく、従属節で述べる内容を前提あるいは根拠として、主節で判断を述べる関係である。以下に例を示す。

(7) 地面が濡れているから、雨が降ったのだろう。

(8) 花子が使っているなら、よい化粧品にちがいない。

[5] V「発話行為の前提」を表すレベル

主節が発話行為を表し、従属節はその発話行為の前提、前置きを表す。

(9) 出かけるなら、オーバーを着ていったほうがいいわよ。

(10) めがね、テレビの上にあったよ。いつも探してるから。

これらの五つのレベルと原因・理由、逆接、条件を表す接続表現との関係は、表1のようになる。

表1．五つのレベルと接続表現（節連接とモダリティの階層）

	I	II	III	IV	V
原因・理由					
タメ(ニ)	+	(+)	–	–	–
ノデ	+	+	(+)	(+)	(+)
カラ	+	+	+	+	+
逆接					
ニモカカワラズ	+	(+)	–	–	–
ノニ	+	+	(+)	–	–
ガ・ケレド	+	+	+	+	+
条件					
ト	+	(+)	(+)	(+)	(+)
バ	+	+	(+)	(+)	(+)
タラ	+	+	+	(+)	(+)
ナラ	–	(+)	(+)	+	+

「限ル」という動詞から派生したさまざまな表現、用法についても、五つのレベルを用いると体系的に説明することができる。以下、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテという接続表現について、見てゆく。

3. 五つのレベルと動詞「限ル」から派生した接続表現との関係

以下、「限ル」という動詞から派生した表現、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテを、五つのレベルとの関係から、その用法と意味の違いをみる。これらは、単に「限ル」という動詞の連用形、あるいはテ形というものではなく、実は少しずつ違った意味になり、しかも本来の動詞としての性格が弱くなっている。例えば、これらの表現は否定形にすることはできない。つまり、～カギリデハナク、～カギラナク、～ニカギラナイデなどの形にすることはできない。また、丁寧形にすることもできない。つまり、～カギリデゴザイマシテハ、～カギリマシテハ、～ニカギリマシテなどという形を用いない。このような面で、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテは、動詞としての性質を失っている。したがって、接続表現として文法化していると思われる。

3. 1　カギリデハ

～カギリデハは以下のような用法に用いる。

(11) 実験してみた限りでは、特に問題はなさそうだ。(IV のレベル)

(12) 私の覚えている限りでは、あの時、先に来たのは花子のほうだ。(V のレベル)

(13) 私のかかわった限りではこのレベルで記号士の侵入を受けた例は一度もありません。(村上)[1] (V のレベル)

上記の例に表れているように、～カギリデハという表現を用いる場合は、カギリは、「範囲」というような意味を表す名詞になっている。従属節は、そのカギリを連体修飾する形なっている。従属節の述語には、認識、知識などを表す動詞が現れることが多い。従属節に現れる動詞の形態を極性（肯定／否定)、テンス、アスペクト、丁寧形に関して述べる。まず、極性に関しては、否定形の使用は不可能であり、つねに肯定形となる。テンスに

関しては、非過去形、過去形のどちらも現れる。アスペクトに関しては、～テイル形、～テイタ形も用いることができる。丁寧形は、場合によっては以下の（14）のように、用いることができると思われる。

（14）実験してみました限りでは、特に問題はなさそうです。

（11）の例は、五つのレベルに関して言えば、IV「判断の根拠」の例といえる。主節で話者の結論を述べるにあたり、従属節は、その根拠となる前提、条件を限定するからである。（12）、（13）の例は、V「発話行為の前提」の例といえる。主節で話者の断定を述べるにあたり、従属節はそのための前提、条件を限定している。

なお、表1に表れているように、おおまかに言って、IV、Vのレベルで用いることのできる表現は、I、II、IIIのレベルでも用いることができる。（五つのタイプについて「レベル」という表現を用いているのも、主にこのことが理由である。）しかしながら、接続表現の中には、もっぱらIV、Vのレベルに用いる表現もある。～カギリデハは、もっぱらIV、Vのレベルを表す表現であるといえる。

3. 2　～カギリ

～カギリには以下のような用法がある。

（15）見渡す限り、平野が続いている。（Iのレベル）

（16）生きている限り、このことは忘れないでしょう。（IIのレベル）

（17）魔法でも使わない限り、外国品とたちうちのできる価格の商品を作れるわけがない。（星）（IIのレベル）

（18）お時間の許す限り、お楽しみください。（IIIのレベル）

（19）私の知る限り、このような植物は日本には存在しない。（IVのレベル）

（20）先生に関する限り、先生には、なんのおちどもないではないか。（山本）（Vのレベル）

～カギリという表現を用いる場合も、従属節はカギリを名詞とする連体修飾の形になる。上記の例に表れているように、従属節の述語の種類は、上記の～カギリデハの場合のような認識、知識を表すものが多いといった制限はない。従属節の述語について述べると、まず極性に関しては（17）のように、否定形が現れることもある。テンスはもっぱら非過去形を用いるようである。アスペクトに関しては、（16）のように～テイル形も可能である（～テイタ形は用いない）。以下（21）のように、丁寧形は場合によっては用いると思われる。

（21）私の存じております限り、このような植物は日本には存在しないと思われます。

五つのレベルに関して言えば、（15）、（16）、（17）、（18）では、カギリは、事態のレベルでの節の連接を表している。（15）では、カギリ節（従属節）は、主節の事態が実現する空間を限定している。同様に、（16）、（18）では、カギリ節は、主節の事態が実現するための時間を限定している。つまり、これらの例では、従属節が、主節で述べる事態が成立するための事態を述べている。このように、空間、時間などを限定する場合において、～カギリは事態レベルIからIIIまでの節の連接を形成すると思われる。また、（17）の場合は、時間的意味のほかに条件の意味も生じていて、従属節で述べる事態が生じなければ、主節が述べる事態も生じないという事態の関係を述べている。（16）、（17）は主節で判断を述べているので、レベルIIの例となる。[2]　また（18）は、主節で依頼の形が現われているので、レベルIIIの例となる。

一方、（19）では、カギリ節は、知識の範囲を限定している。このように、知識、認識といったものを限定する場合は、それが前置きとなって、主節では、話者の判断が現れることが多い。（この点は、上記の～カギリデハの場合と共通する。）したがって、（19）のようなものは、IVレベルの接続であると思われる。また、（20）では、従属節は話題の範囲を限定し、主節では、それに関する話者の発話行為を表している。したがって、Vのレベルの連接であると言える。

このように、～カギリという表現は、何を限定するかによって、五つのレベルにわたって用いることができる。一見、同じ表現のように見えるが、実は意味する内容が異なっている。

3. 3　～ニカギッテ

～ニカギッテという表現には、以下のような用法がある。

（22）会員の皆様に限って、見本を無料でお届けした。（Iのレベル）

（23）会員の皆様に限って、見本を無料でお届けしたい。（IIのレベル）

(24) 会員の皆様に限って、見本を無料でお届けします。(IIIのレベル)

(25) 急いでいるときに限って、バスが遅れる。(IVのレベル)

(26) 貧しいものに限って、金のよい使途が思い浮かばぬものである。(三島) (IVのレベル)

(27) 家の子に限って、そんなことはいたしません。(Vのレベル)

(28) 文太郎に限って、約束をたがえるような男ではありません。(新田) (Vのレベル)

～ニカギッテという表現は、つねに「名詞＋ニカギッテ」という形で用いる。「～」の部分に動詞は入らない。

(22)、(23)、(24) の例では、～カギッテは「限ル」という動詞の文字通りの「限定する」という意味を表すと思われる。これらの例では、否定形で～カギラズニという形でも使える。したがって、動詞としての性質を有している。

また、(22)、(23)、(24) の例では、主節の述語の形態が異なるものの、従属節と主節はすべて事態のレベルの結びつきを表している。(22) は、主節で実際に起こった事態を述べているので、Iのレベルである。(23) は、主節で話者の願望を表しているのでIIのレベルである。(24) は、主節で働きかけを表しているので、IIIのレベルである。

しかしながら、(25)、(26)、(27)、(28) などの例では、動詞「限ル」の意味は文字通りの「限定する」という意味からははずれている。むしろ、いわば取り立て詞のような意味になっている。また、従属節と主節は、現実の事態と事態の結びつきを表しているわけではない。以下説明する。

(25) では、～ニカギッテの意味がいわば取立て詞の「バカリ」のような意味になっている。(26) でも同様に、「～は特に」という取り立ての意味が生じている。また、(25)、(26) に共通して言えることは、従属節と主節の結びつきは、現実世界において実際に起こっている事態と事態の結びつきを表しているのではないということである。あくまでも、話者の認知世界における状況を述べているのである。「急いでいるときは遅れないでほしい」、「貧しいものこそ、お金をうまく使うべし」という話者の期待に反して、むしろ反対の状況になっていることに対する話者の不満、苛立ち、嘆きといったものを表している。

これまであげた例のように、IVのレベルの節の連接の代表的な例は、IV「判断の根拠」という名前のとおり、従属節が主節で述べる判断の根拠になっているような場合である。しかしながら、すでに述べたように、IV、Vのレベルの大きな特徴は、現実の事態ではなく、話者の認知世界における従属節と主節の結びつきを表すという点にある。しかも、(25)、(26) の例では、話者の判断を表している。したがって、(25)、(26) などの例は、IVのレベルであると言える。

一方、(27)、(28) の例では、～ニカギッテは、いわば取立て詞の組み合わせ「ダケ＋ハ」のような意味になっている。また、主節で断定、あるいは話者の主張を発話行為として述べるにあたって、～ニカギッテ節はその前置きを示す関係になる。したがって、(27)、(28) の例は、Vのレベルの連接を表している。

～ニカギッテも、～カギリと同様に、五つのレベルにわたって用いることができる。一見同じ表現であっても、用い方によって、表す意味が異なる。

以上、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテという表現を五つのレベルから考察した。五つのレベルとこれらの表現の関係を表2で示す。～カギリデハ、～カギリの場合、IV、Vのレベルでは、述語の意味に制限があるので、(+) とした。

表2. 五つのレベルと～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテ

	I	II	III	IV	V
～カギリデハ	–	–	–	(+)	(+)
～カギリ	+	+	+	(+)	(+)
～ニカギッテ	+	+	+	+	+

このように、五つのレベルを用いると、これらの表現のさまざまな用法と意味の違いを体系的かつ統一的に述べることができる。

また、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテに前接する、従属節の述語の特徴をまとめると以下のようになる。

表3. ～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテに前接する述語

	否定形	過去形	～テイル形	丁寧形
～カギリデハ	−	+	+	+
～カギリ	−	−	+	+
～ニカギッテ	−	−	−	−

表2、表3に表れているように、同じ「限ル」という動詞から派生した表現が、形態、統語の条件の違いにより、異なる意味を表している。

さらに、「限ル」という動詞は、「～ニ限ル」という形になって、文末のモダリティ表現になる場合がある。以下に述べる。

4. 文末モダリティとしての「～ニ限ル」

文末表現としての「～ニ限ル」は、名詞に後接する場合と、動詞の非過去形に後接する場合がある。「名詞＋ニ限ル」の場合は、単に「限定する」という、「限ル」という動詞の意味になる場合もある。さらに「～が一番だ、～が最も望ましい」といった意味になる場合もある。[3] 一方、「動詞（非過去形）＋ニ限ル」の場合は、つねに「～が一番だ」といった意味になるようである。

4. 1 「名詞＋ニ限ル」

まず、～ニ限ルが名詞に後接する場合からみる。

(29) 入場者は1000人に限る。

(30) 使用する水は、水道水に限る。

(31) 夏はビールに限る。

(29) の例は、「限定する」という意味になる。一方、(30) は、「限定する」という意味と、「～が一番だ」といった意味の両方に解釈することができる。(31) の例は、「～が一番だ」という意味になる。

(31) のような用法は、「限ル」を文字通りの「限定する」という意味で用いる場合と比べ、意味、活用（時制、アスペクト、極性など）、格構造の点において異なっている。

(a) 意味：「限定する」という意味ではなく、「～が一番だ、～が最も望ましい」といった意味になる。

(b) 活用：「限定する」という意味では、過去形にすることも自由にできる。しかし、過去形にしてしまうと「～が一番だ、最も望ましい」という意味にならない。

(32) 入場者は1000人に限った。

(33) 使用する水は、水道水に限った。

(34) 夏はビールに限った。

同じく、～テイル形にした場合も、「～が一番だ」の意味にならない。

(35) 入場者は1000人に限っている。

(36) 使用する水は、水道水に限っている。

(37) 夏はビールに限っている。

また、同様に「限定する」という意味では、否定形にできる。しかし、否定形にすると、やはり「～が一番だ」

の意味にはならない。

(38) 入場者は1000人に限らなかった。

(39) 使用する水は、水道水に限らなかった。

(40) 夏はビールに限らなかった。

(c) 格：「限定する」という意味では、「限ル」という動詞の項としては、ガ格とヲ格の二つをとる場合、あるいは、ガ格、ヲ格、ニ格の三つをとる場合との二つの場合がある。以下に例をあげる。

(41)（ガ・ヲ）：主催者が入場者数を限った。

(42)（ガ・ヲ・ニ）主催者が入場者数を1000人に限った。

(43)（ガ・ヲ・ニ）：実験者が使用する水を水道水に限った。

しかしながら、「～が一番だ」という意味になる場合は、ガ格、ヲ格は現れない。逆に言えば、ガ格、ヲ格を補うと、「～が一番だ」という意味にならない。「限定する」という意味にしか解釈できない。

(44) 私が夏に飲むのをビールに限る。

(45) 私が寒いときに飲むのを熱燗に限る。

以上のように、～ニ限ルが名詞に後接し、「～が一番だ」といった意味をなす場合は、活用、格構造において、限定がある。

また、「～が一番だ」という意味になる場合は、必ず話者の気持ちを述べている。つねに、話者の発話時の心的態度を表すという点で（中右 1994:33 参照）、この「～が一番だ、最も望ましい」という意味で用いる文末の「限ル」は、モダリティ表現であると言える。

4. 2 「動詞（非過去形）＋ニ限ル」

次に、～ニ限ルが動詞に後接する場合をみる。動詞といっても、活用に関しては非過去形（～テイルも含む）の場合のみで、過去形にはならない（例（48）参照）。また、意味の面では、「動詞（非過去形）＋ニ限ル」の場合は、「名詞＋ニ限ル」の場合に二つの意味が可能であったのに対し、「～に限定する」という意味には解釈できず、つねに「～が一番だ」といった意味のモダリティ表現になると思われる。

(46) 考えるのに疲れたときは、散歩を［する／＊した］に限る。

(47) 太郎を気持ちよく働かせるには、よけいなことを［言わない／＊言わなかった］に限る。

(48) 病気のときは［寝ている／＊寝ていた］に限る。

また、「動詞（非過去形）＋ニ限ル」の場合においても、「名詞＋ニ限ル」の場合でみた（a）から（c）の三つの条件のうち、（a）意味、（b）活用においては同様にあてはまる。しかしながら、（c）の格構造においては、ガ格を補うと不自然な文になる（例（49）から（51））。ヲ格を補うことはできない。しいてヲ格を補うと、やはり不自然な文になる（例（52）から（54））。いずれの場合も、「～が一番だ」という意味にならない。

(49) ？私が考えるのに疲れたときは、散歩をするに限る。

(50) ？私が太郎を気持ちよく働かせるには、よけいなことを言わないに限る。

(51) ？あなたが病気のときは、寝ているに限る。

(52) ？散歩をするのに疲れたときにすることを、散歩する（こと）に限る。

(53) ？太郎を気持ちよく働かせるためにすることをよけいなことを言わない（こと）に限る。

(54) ？病気のときにするべきことを寝ている（こと）に限る。

上記に示したように、文末表現の～ニ限ルは、形態（活用）と統語（格構造）の面で、制限が非常に強い。「限ル」という動詞が「限定する」という意味を表す場合と比べて、動詞らしさをかなり失っている。また、意味の面からみても、この～ニ限ルは、もとの動詞やそれから派生した接続表現などと比べて、著しい違いがある。これらの点を考慮すると、この文末表現の～ニ限ルは、きわめてモダリティらしい表現といえる。

金田一（1953:167）は、モダリティという術語は使っていないが、今日モダリティと呼ぶ現象を考察している。文末に現われるさまざまな助動詞の用法を考察し、以下のように結論している。

「主観的表現の語句は、活用せず、だいたい文の最後に用いられる。・・・」

本稿における～ニ限ルの考察の結果は、この金田一の結論と合致するものである。ただし、金田一は、活用に

関しては「終止形」だけを用い、過去形を用いないということしか述べていない。（金田一は、「終止形」という言葉を動詞の活用形の一つとしての「終止形」という意味で使っていると思われる。）しかし本稿では、～ニ限ルに関して、否定形、～テイル形なども用いないことを示した。さらに、金田一は、統語の面に関して考察をしていないが、本稿では、～ニ限ルの文末表現に関して、格構造の面で強い制限があることを示した。

なお、～ニ限ルという表現について興味深いのは、「ニ」という格助詞が登場するにもかかわらず、～ニ限ルは、動詞にも後接することができるということである。動詞に直接「ニ」が後接する場合は、他にも「動詞＋ニチガイナイ」、「動詞＋ニ至ル」、「動詞＋ニ過ギナイ」など色々ある。こういった表現に共通して言えることは、動詞に直接「ニ」が後接するのは、かなり定型化して、慣用化した表現の場合であるということである。

5. 結論

以上、「限ル」という動詞から派生した三つの表現、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテについて、五つのレベルの観点から、その意味、形態、統語の違いを述べた。また、文末表現としての～ニ限ルについて考察し、「限ル」という動詞が文末のモダリティ表現として文法化していることも述べた。以上の考察から、以下のことが言える。

(a) 同じ「限ル」という動詞から派生した、～カギリデハ、～カギリ、～ニカギッテなどは、接続表現として文法化し、それぞれ異なった意味、形態、統語条件を持つ。その用法の違いは、5つのレベルに沿って体系的に説明できる。

(b)「限ル」という動詞は、本来の「限定する」という意味から、いわば取り立て詞、あるいは文末のモダリティのような意味を持つに至っている。

なお、これまで、「取り立て詞」というと、助詞（マデ、モ、ハ）や分量、程度を表す表現（ダケ、クライ、ホド）などを見る傾向があった（例えば沼田2000参照）。ところが、例えば、～ニカギッテは動詞から派生している。本論3. 3節で述べたⅣ、Ⅴのレベルの～ニカギッテなどは、意味の面からも、きわめて「取り立て詞」に近いものである。また、意味の変化の面からも「取立て詞」の場合と共通点が大きいと考えられるが、このことの詳細は稿を改めて述べたい。いずれにしても、本論の考察は、「取立て詞」というものをより広い観点からとらえるという点においても寄与すると思われる。

また、文末のモダリティ表現としての「限ル」にしても、「限定する」という意味の一般的な意味の動詞と同じ形のまま用い、ある環境ではモダリティ表現になるという側面が興味深い。この「限ル」の例は、文法化という観点からも示唆に富んでいる。

注

1. 例文が、小説などからとった実例の場合は、作者の名前を文末のカッコ内に示した。名前のない例文は、筆者の作例である。
2. ～カギリを用いる例として、「できる限り頑張ります」というようなものもある。この例のカギリは、ダケのような意味になって、副助詞のような働きをもつ方向に向かっているようである。これも、文法化の例であろう。
3. 「～ニ限ル」に言及した先行研究はある。例えば、森田（1980：89）も、「・・・にかぎる」という形で、「それが一番だ」という意味を表すと述べている。しかし、「～ニ限ル」をモダリティ表現として考察した先行研究はないようである。

参考文献

金田一春彦. 1953. 不変化助動詞の本質（上）――主観性と客観的表現の別について――. 国語国文第22巻第2号：67-84. 不変化助動詞の本質（下）――主観性と客観的表現の別について――. 国語国文第22巻第3号：149-168.

角田三枝. 2001. 日本語のネクサスとモダリティー. 2001年度秋季大会要旨集, 24-31. 国語学会.

_____. 2003. 日本語の節・文の連接とモダリティ. 博士論文. お茶の水女子大学.

_____. 2004. 日本語の節・文の連接とモダリティ. くろしお出版.

中右実. 1994. 認知意味論の原理. 大修館.

沼田善子．2000．3取り立て．金水敏、工藤真由美、沼田善子著，日本語の文法2，時・否定と取り立て，151-216．岩波書店．
森田良行．1980．基礎日本語2．角川書店．

＜例文出展＞

CD-ROM「新潮文庫の100冊」，1995，新潮社に収録．
新田次郎．「孤高の人」
星新一．「人民は弱し　官吏は強し」
三島由紀夫．「金閣寺」
村上春樹．「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」
山本有三．「路傍の石」

（2006年1月10日受理）